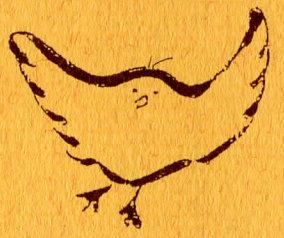
'89水俣から '92タイへ、そして未来へ

PEOPLE'S PLAN 21 CENTURY

希望の連合

'92ピープルズ・プラン21世紀実行委員会



'89水俣から'92タイへ、そして未来へ
PEOPLE'S PLAN 21 CENTURY

1992年6月27日　発行

発行者　'92ピープルズ・プラン21世紀
実行委員会
〒113 東京都文京区本郷1－13－2
第2東野ビル2F
PARC自由学校気付
☎ 03-3816-0161
〒399-81 長野県南安曇郡三郷村
大字温2059
神田浩史気付
☎ 0263-77-6708

版　下　北陽工房
印　刷　ジャムプリント

400円

J00009

もくじ

ピープルズ・プラン21世紀とは　2
村井吉敬

水俣宣言　4

いま日本では　16

世界の反響、人びとの声　26
武藤一羊

92年タイへ　30
バントン・オンダム

民衆の自己決定権を　35
'92タイPP21組織委員会

タイへ　そして未来へ向けて　45
神田浩史

PP21出版物リスト　47

1989年夏　ピープルズ・プラン21世紀のプロセスが日本から始まった

1989年夏、ピープルズ・プラン21世紀の国際民衆行事には、海外から約300人と日本各地の約10万人の人びとが集いました。その集約として採択した「水俣宣言」は、各地でたたかい、生きる人びとの無数の経験や知恵、希望をあわせ、現代の社会に対する深い警告を発しました。カネや権力で分断された構造をこえて、「民衆がつくる社会」、民衆の21世紀を宣言した国際的なつながりをもとに、よりたしかな構想と具体的な実現をめざして、ピープルズ・プラン21世紀のプロセスが始まっています。

ピープルズ・プラン21世紀とは

村井吉敬（「オルタ」編集長）

さまざまな政党がある。さまざまな主張や改革のプランがある。いろいろな市民の運動がある。原発はいらない。情報公開をせよ。男女共生社会の実現を。多民族共生社会を。安全な食べ物を。自衛隊の海外派兵反対。米輸入の自由化反対。第三世界の民衆と連帯。アジア太平洋戦争犠牲者に戦後補償を。タイの農民自立支援。熱帯林伐採反対。ODA基本法制定を…。

一方、私たちは今の世の中を全体としておかしいのではないかと思っている。国会も、既成の政党も、官僚も、多国籍企業も、大企業も、マスコミも、ブッシュも、エリツィンも、宮沢も、渡辺も、田辺も…。

もっと根源的には、20世紀を疑い、コロンブス以来の世界の秩序もうさん臭いものだと思い始めている。地球環境は完全におかしくなってしまった。しかし、企業も国家（北であれ南であれ）もカネさえかければ環境はどうにかなるとまだ思っている。南北の格差はさらにひどい状況になっている。南北というより、少数の金持ちと、多数の貧乏人の格差がこれほどひどい状態になったことはいままでになかったことだ。一見「豊か」に見える「北」の民衆は労働ロボット、教育ロボット、レジャー・ロボットでしかない。人びとの暮らしにはまったく必要もない武器はあい変わらず造られ、売られ、人の血が今日も流されている。

近代社会、近代世界は女性、第三世界、少数民族、先住民族、子ども、障害者、さらには農民、漁民、採取狩猟民などを弱者に仕立て上げ、その人びとの豊かさを奪ってきた。大きな企業や国家が自己の意志を貫徹するためにできあがった怪物が近代世界ではないだろうか。

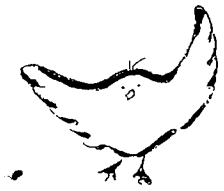
この怪物にかわって、人間らしい社会、人びとが本来持っている豊かさを実現しようというのがピープルズ・プラン21世紀（PP21）だ。

原発いらない、安全な食べ物を、第三世界民衆と連帯を、戦後補償を、地球循環の暮らしを、女性の自立を…。こうしたさまざまな民衆運動、市民運動をしている人びとが、共に集まり、共に共有し得る未来を創っていこうというのがPP21だ。脱原発運動、女性運動、戦後補償要求運動、海外協力NGO、労働運動、地域ユニオン、消費者生協運動、農民運動、環境保護運動、先住民族の権利獲得運動…。これら諸運動はお互いの顔がなかなか見えないタコ壺的な運動をしているように見えなくもない。タコ壺を出て、あるいは垣根をとっぱらって、さらには国境という垣根も越えて、人びと（民衆）が主人公になる全面的な運動を展開しよう。国家でも、企業でも、労働組合でも、政党でもない、ピープルが垣根や、国境を越えて（トランス・ボーダーして）つくる〝うねり〟のようなものといえよう。

党が指導したり、組合が方針を上から出したり、ある決定を他に押しつけたりする運動ではない。完全に民主的で、完全に自治の優先する運動だ。売買春反対運動の人びとと、米自由化反対農民運動の人びとと、脱原発運動の人びとが出会い、それぞれの数珠玉を見せあう。あるいは、それぞれの撚った糸を持ち合う。色のちがいや、サイズのちがいやがある。だが、数珠玉をつないだり、糸を織り合わせようという意志さえ持っていればそれでよい。21世紀、世界中のピープルがつなぎ合わせた数珠玉、民衆が織った布が実現する。

水俣宣言——希望の連合

わたしたちは自信をもっていえる。
こうした越境する行動は、
絶望的な状態への民衆の当然の対応であるばかりではない。
このような行動を通して、人びとは、
自分たち自身の二一世紀を力をあわせてつくりだす
「ピープル」となるのである。



◉二〇世紀末の叫びは生存である

二〇世紀はじめのスローガンは進歩だった。二〇世紀末の叫びは生存ということだ。**つぎの世紀からのよびかけは希望である。**この未来からの希望につき動かされ、またつよい危機感にうながされて、わたしたちはピープルズ・プラン21世紀の総括会議を開いた。

わたしたちが水俣の地に集まったことには意味がある。水俣はわたしたちに開発の極端に殺人

的な姿を象徴的に示す地だからだ。ボパールとチェルノブイリがそうであったように、進んだ科学、技術、生産技法をもつ巨大組織が水俣の人びとに恐怖と病いと死をもたらし、その美しい海に取り返しのつかない損害をあたえた。水俣、ボパール、チェルノブイリという三つの災害は、わたしたちの時代の指標といえるだろう。水俣では、資本主義国家の工業が自国の市民を汚染した。ボパールでは、巨大な米国の多国籍企業が南の国民を汚染した。チェルノブイリでは、社会主義政府が、自国の国土と国民に、そして国境を越えて全世界に放射能をまき散らした。ここでこれ以上環境の危機の例を数えあげる必要はない。この三つの例は示している。どこにも隠れるところはないということを。

◉「進歩」と「開発」がもたらしたもの

しかし、「進歩」という名の災害を象徴するのはこれらだけではない。先住民にとって、それはかれらの土地や資源の収奪と搾取、生きるすべそのものの破壊と崩壊をもたらすものであった。

女性にとって、開発は、あらゆる面で力の獲得を抑え込むことを意味してきた。女性は、男性中心の宗教、男性中心の科学と知識、男性中心の悪しき開発によって締め出されてきた。巨額のポルノ産業およびセックス産業は女性をただひたすら商品として扱うものだ。その一方で家庭の中では女性はいぜんとして従属的地位におかれつづけている。

第三世界の貧困層にとって、開発とは、自分自身の資源や生活に対する支配権をますます失うことを意味していた。生きるためのかれらのたたかいは困難になる一方であり、生存すること自体を危うくされている。**確かに進歩と開発はあったが、それは少数者のためのものでしかなかった。**その他はみな自分たちの生活や文化や価値を犠牲に

して、この開発のツケを支払わされている。

開発と進歩が悲惨な結果をもたらしたのは、財貨を持ちたいという強迫観念が土台になっているからである。利益と権力がこの開発の神々として登場してきた。この開発の背後には、人間（man、男性）こそ最高権威であり、人間は自然を思うがままに利用し悪用できるという前提がある。開発は、自然と調和して生きるよりもむしろ、自然を征服するための事業なのだ。

開発の下で権力はますます集中化した。「民主主義」ということばが使われれば使われるほど、それはその実践とは縁遠いものになった。先住民と少数集団にとって、民主主義は多数者の専制政治でしかなかった。第三世界の貧困層にとって、民主主義とは権力をもつ者、ごく少数のエリートによる支配を意味した。被抑圧者にとっては開発も民主主義もいまわしい言葉になってしまったが、それらはいずれも、実際には貧困化と無権力化を意味したからである。

開発はまた、多様性がもつ豊かな価値を破壊した。民衆の創造性と能力を奪い取った。決定権はますます少数者の手に握られている。経済的決定を下すのは巨大複合企業であり、政治的決定を下すのは自国の首都あるいは大国の首都における有力者である。映画・テレビ産業は、なにが娯楽であり誰がわたしたちのヒーローかを決める。どのような教育をこどもたちが受けるか、何人こどもを産んでよろしいかを決めるのは政府である。人工中絶を強制する政府もあれば、中絶を禁止する政府もある。わたしたちが信ずべき宗教を決める政府さえある。

かつて手にしていた力や自治権、創造力、人間らしさといったものを、人間はますます失いつつある。規模の小さい地域社会はもとより、貧しくて小さければ国家でさえ、以前ほどの自治権をもってはいない。それらはみな世界市場、世界銀行の政策、世界の大国のパワーゲームの従属させられているのである。

貧富の格差、南北の格差は拡がりつつある。この二〇年間だけで前世紀全体をうわまわる富と資源が第三世界から奪い去られた。次の一〇年間には、北におけるさらに急激な権力の蓄積、集中および中央集権化が眼前に展開するかもしれない。債務の返済、利潤、特許権料、資本逃避、交易条件の悪化などは、帝国主義国による搾取のメカニズムの一部である。下品でみにくく、正義にもとるこうした開発はさらに、北のなかに南をつくりだし、先住民や少数民族、出稼ぎ労働者、失業者などを悲惨な生活条件の下においている。

二〇世紀は、歴史上のどの時代より多くの、そしてずっと残虐な戦争をもたらした。過去の時代に想像もつかなかったような殺戮の技術が発達した。わたしたちの偉大な保護者だと思われていた国家が、最大の殺人者、戦争で他国の人びとを殺すばかりでなく、前代未聞の数で自国市民を殺すものであることがはっきりした。二〇世紀はジェノサイド、エスノサイド、エコサイドおよびフェミサイドといったものを永続化させ、増大させた。しかもこのような仕打ちが、「進歩」とか「開発」と呼ばれるものの名前でおこなわれてきた。これらすべてはわたしたちにいやおうなく問いかけている。**歴史の進歩についてのわたしたちの理解にはなにか根本的な誤りがあるのではないか。**なんのためにたたかうかについて、ひどく間違った把握をしているのではあるまいか。どこに希望を見出だすべきかについて、ひどく間違ったイメージを抱いているのではあるまいか。

◉希望の合言葉「じゃなかしゃば」

水俣の方言である「じゃなかしゃば」ということばは、PP21の参加者すべてに親しいことばになった。「じゃなかしゃば」は「今のようでない世の中」を意味する。これは美しいことばだ。

水俣集会では新しい歌「じゃなかしゃばば欲しかよ」がうたわれた。

水俣集会がわたしたちにあきらかに示したことは、今日の世界情勢が歴史上初めて世界中の民衆を、運命を共にする共通の立場に置いたということである。わたしたちが生きること、尊厳をもって、おのおのの自治と自決権を侵害することなく多様性をたがいに尊重しつつ、共に生きたいと望むならば、どこにいようとわたしたちには「じゃなかしゃば」が必要である。

この集会でわたしたちは、「じゃなかしゃば」への願いを語りあった。**わたしたちの希望は空疎な希望ではない。**蜃気楼ではない。この希望は、わたしたちを嘆かせ、時には絶望の淵に立たせる不正、邪悪、腐敗のただ中から生まれたものだ。わたしたちが論じ合った希望は、不正のみならず社会や人間や環境の崩壊とたたかうようわたしたちを鼓舞してやまない希望だ。わたしたちは問いただしあった。果たしてこのような希望に根拠があるのかを。

人間だけでなく、生命と自然そのものが冒されつつある。いまや、空も海も山も川も森も植物も動物も、およそ生きとし生けるものすべてが危機にさらされ、生存を脅かされている。

これら自然の内なるものたちの声が、はっきりとわたしたちの耳に聞こえる。人間のいのちの尊厳を回復するためだけでなく、**すべてのいのちのためにたたかわねばならない**ことを、わたしたちは自覚した。

わたしたちが生まれ落ちた世界は、敵対する諸集団に分裂している。共に生きつづけることを望むならば、こうした分裂を克服しなければならない。水俣で出会ったわたしたちは、たがいを分断する構造を打破しようという意志を確認しあった。

いま、ここに、わたしたちはきっぱりと言おう。二一世紀は堕落した開発に加担する諸勢力によってではなく、これに抗する諸勢力によってうち建てられねばならないと。そこにのみ希望はあり、他にはありえないと。

◉人びとは動き出している

今日、アジア太平洋地域の何百万の民衆が、わたしたちの眼前で行動で示していることはまさにそのことである。これらの人びとは、あたかも運命であるかのように外から押しつけられてきた状態を拒否し、飛躍の用意をととのえている、いや飛躍をこころみつつある。民衆の運動は大波のようにつぎつぎへと出現し、広がり、国境を無視し、補いあい、あたらしいコミュニケーションのネットワークにたすけられながら、ますます強まる危機への自覚を共有している。韓国、フィリピン、ミャンマー（ビルマ）などの大規模な闘争は爆発的な力を示した。わたしたちは最近、中国民衆の新しい民主化運動が立ち上がるのを目のあたりにした。

最近のグラスノスチ（情報公開）の経験は、参加民主主義が普遍的、永続的に重要であることを再確認しただけでなく、従来の反共主義の基盤を弱め、冷戦イデオロギーの正統性を否定した。そしてそのことによって、民衆の闘いに助けとなる新しい条件を作り出しつつある。しかしながら、ペレストロイカ（改革）は、経済的競争力をつけることを優先させて、正義と民主主義をめざす民衆のたたかいへの支援を後まわしにする方向に進むかもしれない。

その可能性はあるとしても、社会主義諸国における改革は、東西の分裂を克服し、世界大の規模で真に民主主義的な権力を確立しようとして努力している社会主義諸国の兄弟姉妹たちとあたらしい連合をつくる機会をうみ出している。

こうした大きい国々でも、小さい国々でも、またどの地域、町、村でも、人びとは動き出している。そしてこうした人びとは、かつてないほどたがいのことを認識し、たがいに目をはなさず、

コミュニケーションをはかり、いまだかつてないやり方で合流しはじめている。どれをとってもそれはあたらしい動きだ。これこそが、わたしたちの状況を定義する主要な力であり、この会議を開催した主要な理由である。**「じゃなかしゃば」は今日の時代の民衆の精神なのだ。**わたしたちが、今世紀がもたらしたあらゆる事柄にもかかわらず、二一世紀は希望の世紀であると宣言することをはばからない根拠はここにある。

◉希望を結ぶあたらしい論理

希望を語る理由はそれだけではない。現在ある構造は、それ自身の矛盾をつくりだすことによって、みずからの足場を掘り崩し始めている。自然に反する成長、共同の安全保障と対立する軍事主義、文化的多様性と相容れない画一性、人間の尊厳と対立する疎外、失われた価値、意味、精神性を取りもどさなければと願う人間と対立する、後先おかまいなしの消費主義などである。**経済はすでに、あまりにもばかげたところまできてしまった**ために、ますます多くの人びとがそれを自分とは無縁で空しいものだとしか感じなくなっている。世界のいたる所で、ますます多くの人びとが、時を同じくして、おたがいのあいだに、そして自然のあいだに調和のある別の生き方を探し求めている。

こうした矛盾は、地球規模の破壊の犠牲者の間から新たな歴史的主体をうみだす力としてはたらいている。すなわち、先住民、女性、失業者、それにいわゆる非公式部門の自営労働者などである。将来に希望をもてず疎外感を抱く若者、社会的関心をもつ知識人もまた、農民、労働者、都市貧困層など大衆の歴史的たたかいに加わりつつある。現に広がりつつある民衆運動から、万人が尊厳をもって生きられる社会をわたしたちはつくりうるという希望が生まれつつある。

新しい状況はこうした熱望を力づける。わたしたちには知識も技術もある。草の根の運動がある。民衆としてのたましいと価値観がある。それらは今日の開発パターンが強要する集団自殺を拒む、民衆の生存のためのたたかいの中で確認しなおされ、発見しなおされ、さらにあたらしく創り出されているのである。

こうした現象が世界中で時をおなじくして出現しているということは、それらを通底する共通性があることを物語っている。**共通の利害、共通の価値、共通の脅威が世界中のあらゆる被抑圧民衆と被搾取集団を有機的に結びつけている**のである。成長、多国籍企業、エリート主義権力の論理に対抗する新しい論理が台頭しつつある。それは真の意味での「多数者の論理」である。ここでいう「多数者」とは世論調査や選挙で数えられる多数者ではなく、世界的な多数者、すなわちもっとも抑圧された人びとのことである。いいかえれば、こうした人びとこそ最優先権を持つべきであり、そのためには、女性、文化、先住民がもつ諸価値によってゆたかにされ、自然と調和する人間的価値に立脚した優先順位の秩序が必要となる。

◉民主主義を取り戻す

地方、国、地域で共通の敵と対決しているこうした民衆の運動の中から、あたらしい国際主義が生まれつつある。これら新しい運動は、国家の役割がからむ特異な矛盾という背景の中で育ちつつある。わたしたちが住む地域は、多国籍資本によって組織されているが、この多国籍企業は、広範囲のしかも異質な地域や人びとをひとつの統合された位階的分業の秩序へと編成しつつある。その秩序の中では農民、労働者、先住民、女性などが従属的立場に立たされる。国家は、多国籍

資本の国内への進入を仲介する機関として、積極的にこの統合を推進している。と同時に、経済の多国籍化は国家の依ってたつ基盤を掘り崩している。この事実は、自らを至高の存在であるとする国家の主張を、また国家が保護者であるというたてまえを疑問に付さざるをえなくする。こうして、国家の正統性は薄れ、民衆が介入する新しい機会がつくり出されつつある。今日、多くの国ぐにでみられるように、国家は弾圧と暴力を強化することで、あるいは、日本の場合にみられるように国家イデオロギーを国民に植え付ける試みを強化することで、みずからを守ろうとする。

この同じ過程の中で、日本の開発エンジンは過熱し、今や手に負えない形で暴走し、過飽和経済を産み出している。日本人は徹底的に管理された状態で必死で働いており、事実上無力な状態におかれている。**日本経済は日本の市民の力を強めてはいない。**むしろ、かれらを無力化し、分断しようとしている。さらに、日本経済は国内に「北」と「南」をつくりだした。「南」に属するのは数百万の低賃金の女性パート労働者、下請け労働者、日雇い労働者、さらに増大する一方の南アジア、東南アジアからの出稼ぎ労働者、さらに急速に周縁化されつつある農民である。

「民主主義」ということばは、民衆から盗み取られ、腐敗してしまった。もともと、民主主義は自治、自決、民衆によるパワーの獲得（エンパワーメント）を意味した。だが、第三世界の民衆の多くにとっては、民主主義はうわべだけの「民政」のレッテルとなってしまっている。権力者の利害に奉仕する国家は、自らの正統性を主張するための手段としてテロと弾圧を用いるが、民主主義はこれをごまかすために利用されているのだ。先住民その他の少数民族にとって、民主主義は「多数者支配」イデオロギーとなり、「少数者」と定義されたかれらは合法的に無視され

てきたのである。

他方、アジア太平洋地域の数十億の人びとは、民主主義のためにいのちを賭けてたたかっている。わたしたちは**民主主義を民衆のたたかいに役立つものとして取り戻さなければならない。**国家ならびに「民主主義」を構成するとされている諸制度が、わたしたちに平和や正義、安全、威厳ある生活をもたらすために、また環境破壊をおわらせるために役立つと信ずることはけっしてできない。わたしたちはそれを確認するところから出発しなければならない。それらのことを実現できるのは自立と自治をもつ民衆の運動だけである。ここでわたしたちが語る民主主義は、先住民その他の少数民族の根本的な人権と自由を認める民主主義であるということを強調したい。

◉越境する政治行動――新しい権利の宣言

同時に、**民主主義は国家の枠内ではもはや達成されえない。**今日、数百万の人びとの生活は、かれらが住むコミュニティの外で、それどころか国外でなされる決定によって支配され、損なわれ、ゆがめられ、破壊されている。こうした決定を下すのは外国政府であり、多国籍企業であり、ＩＭＦ、世界銀行、大国の首脳会談である。

したがって、わたしたちはここに宣言する。抑圧されている人びとには、自分たちの生活を左右する決定の実施については、その決定がどこでくだされるにしろ、これを批判し、これに反対し、かつその実施を阻止する天賦のかつ普遍的権利があることを。

わたしたちは宣言する。この権利は、民衆の権利であり、国家が設定するいかなる人為的法律ないし制度よりもさらに基本的な権利であることを。それは、民衆には、国家や社会を隔てるあ

らゆる境界を越え、民衆を支配し、破壊しようとする権力の中枢にまでそのたたかいを推し進める権利があるということを意味している。

この権利は、権力者が民衆を抑圧し、搾取し、民衆から奪い取るために国境を越える行動をけっして正当化するものではないことを、わたしたちははっきりという。その反対に、わたしたちは主張する。常におこなわれているこうした介入に対し、民衆は抵抗する権利があることを。

わたしたちは確認する。服従を強いられている民衆の自決と独立をめざすたたかい、みずからの政府を樹立しようとするたたかい、あるいは政府を改革しようとするたたかいが決定的に重要であることを。同時に、わたしたちは信ずる。長期的には、こうした民衆の越境する政治行動こそが、国家の支配力を掘りくずし、国際資本の権力に対抗し、わたしたちが望む二一世紀を産み出すであろうことを。

◉二一世紀をつくりだす「ピープル」になる

アジア太平洋地域の民衆がおかれている現状について、わたしたちはいかなる幻想もいだいてはいない。支配権力は民衆を分断し、民衆間の敵意をたきつけることによってみずからの立場を維持している。支配者はわたしたちを支配しようとするだけでなく、わたしたちの相互の関係を管理し、わたしたちが自身のためにそうする権利を奪っている。わたしたちはこれを拒否し、克服しなければならない。越境する政治行動、支援、連帯行動は現存する分断、とくに南北にすむ民衆の分断を乗り越えるあたらしい「ピープル」を、次第に成長発展させるであろう。

これは決してユートピアではない。わたしたちが語ってきた行動は、現実にアジア太平洋地域で、また世界中で進行していることである。わたしたちは自信をもっていえる。こうした越境する行動は、絶望的な状態への民衆の当然の対応であるばかりではない。このような行動を通して、人びとは、自分たち自身の二一世紀を力をあわせてつくりだす「ピープル」となるのである。

いま日本では

89年の国際民衆行事をきっかけとして、日本各地にさまざまな活動の輪が広がっています。これらがPP21の具体的な形です。

第三世界の民衆とともに生きるために

草の根援助運動●北沢洋子

PP21の神奈川国際シンポジウムの決議にもとづいて一九九〇年三月横浜で設立された。連合神奈川、かながわ女性会議、生協などが参加し、神奈川県など一七の自治体の後援を得ている。これまでのところ、フィリピン、マレーシア、タイ、インド、インドネシアなどでのNGOが進める自立・自助の開発プロジェクトへの援助を続ける一方、横浜、川崎など五つの都市で海外NGOの代表を迎えてシンポジウムを開く、アジアへのスタディツアーを年二回送る、など開発教育にも力を入れてきた。できるだけ多くの人が援助活動に参加できるよう開発プロジェクトのカタログ集を毎年発行し、そのビデオの作成にも取り組んでいる。バレンタインデーには、「義理チョコやめて第三世界に愛のプレゼントを送ろう」のキャンペーンを行なった。

自分と日本を変えるための学びの場

全国の自由学校

各地でPP21を担った人びとが中心となって、アジアを知り、自分を、そして日本を変えようという学びの場としてスタートした自由学校は、現在、札幌・安曇野・富山・福岡・東京の五カ所があります。PP21の連絡センターであり、それ自体は、地域の独自性を生かした教育のオルタナティブ、オルタナティブな教育を模索。人びとが集い、情報を交換し、あらたなエネルギーを生み出していけるようにと活動しています。講座は、語学をはじめ、女と男の関係や環境や歴史を考えるコース、アジアの民衆と私たちの暮らしを結ぶ調査や運動経験のシェアなどさまざまなものが開かれています。具体的な資料や声なき人びとの声を提供し、参加者のディスカッションをとおしたコンセンサス創りをめざしています。

弾圧に対して連帯の闘いを

APWSL日本委員会●高幣真公

アジアの工業化とともに労働者の運動が発展する中、一九八三年十一月、一二カ国の草の根活動家がタイでアジア太平洋労働者連帯会議（APWSL）を結成した。アジアの労働者が直面する共通の問題を交流しあい、弾圧に対して連帯の闘いを取り組むことが基本的な課題である。

草の根援助運動●神奈川県横浜市戸塚区品濃町511-3 トレントビルドIF
☎045(825)8557
全国の自由学校●札幌☎011(786)3440／安曇野☎0263(77)6708／富山☎0764(41)7843
福岡☎092(526)9857／東京☎03(3816)0161
APWSL日本委員会●東京都港区新橋4-21-7 加藤ビル2F
☎03(3433)0375

八九年の日本でのPP21に合わせて一五カ国代表が参加して第四回総会を開催した。それを契機に今までばらばらに参加していた団体、個人を日本委員会として構成、組織を広げてきた（現在、団体会員、個人会員それぞれ五〇余）。日本の労働運動を伝える英語のニュース『APWSL JAPAN』とアジアの労働者の状況を伝える日本語機関誌『リンクス』をともに季刊で発行する。

先住民族アイヌは、いま

●花崎皋平

アイヌは、日本とロシアにまたがる北方地域に古くから居住する先住民族です。アイヌ民族の、現在の中心課題は、差別法である「北海道旧土人保護法」を廃止して、それに代わる「アイヌ民族に関する新しい法律」（アイヌ新法）を、国に制定させることです。この法律案は、アイヌ民族の組織である「北海道ウタリ協会」が立案したものです。

文化面では、アイヌ文化祭（年一回）、アイヌ語教室の開設（北海道各地八カ所）、アイヌ史の編集出版、伝統儀式、古式舞踊の継承など、アイデンティティを自覚化するうごきが活発化しています。

「開発」による環境破壊（核のゴミ捨て場、ゴルフ場、ダム、森林伐採など）へのアイヌによる反対の運動も強まっています。

祭りを通して人権を考える

ヒューマンライツフェスティバル実行委員会●吉田登志夫

人権をテーマとして、一九九二年九月、福岡でお祭りをやります。実行委員会には「アジアに生きる会」「パレスチナの会」「東チモールの会」などの市民運動グループや部落解放同盟、国労反差別国際運動、グリーンコープ北ブロックなどの大きな（？）組織などが参加し、それぞれの課題をヒューマンライツフェスティバルで表現しようとしています。

フェスティバルは「世界と日本の人権展」を中心に、講演会、シンポジウム、映画、演劇、コンサートと多彩に展開される予定です。事務局は「PP21福岡自由学校」。興味ある方はのぞいてください。

地球的に考えた地域農業の実践のために

置賜百姓交流会●菅野芳秀

農業は今、大きな「危機」の中にあります。その危機は世界的で、ウラで糸を引いているのは、弱肉強食の自由貿易を堅持したい多国籍資本とアグリビジネスです。

私たちは八九年のPP21「百姓国際交流会」において、世界の農民、農業労働者が、農業を滅ぼそうとする「共同の敵」に、力をあわせてたちむかうことの大切さを知りました。また、協力しあう運動の渦中に、対案として私たちの「希望」を育てあうことの重要性をも知りました。

PP21「農業共同声明」は、参加国農民が共同でつくりだした「希望」への当面の目標です。

花崎皋平●札幌市東区伏古4条4丁目5-2 自由学校「遊」
☎011(786)3440
ヒューマンライツフェスティバル実行委員会●福岡県福岡市中央高砂2-1-21
☎092(526)9857
置賜百姓交流会●山形県西置賜郡白鷹町大字畔藤1740 菅原方
☎0238(85)2646

それにもとづき、私たちは、反ガットの闘いや、タイ、韓国、台湾、フィリピンなどの農民との交流を重ねながら、「対案」としての、地球的に考えた地域農業の実践のために、さまざまな取り組みを行っています。

北から南へという関係を逆転させる

南からの調査団●井上礼子

「南北問題の調査はほとんどいつも北の人間が南へ調査に行くという形で行われるが、問題の根源は実は北にあるのだ。北から南へという関係を逆転させる意味で、日本による環境破壊、生活破壊などの被害を被っている南の人間を日本に招いて調査旅行を行ってはどうか」と、PPプロセスのひとつとして南からの調査団が始まった。

その第一弾として、九一年三月から四月、マレーシアのアジア・レア・アース（三菱化成の現地合弁会社）による核廃棄物の投棄によって被害を受けている人びとを招いて水俣、北九州、岡山、大阪、東京の各地でキャンペーンを行った（「ブキメラ村ネットワーク」の項参照）。

第二弾は、ゴルフ場、リゾート開発をテーマとして一九九一年五月に行われた。マレーシア、タイ、インドネシアでゴルフ場、リゾート開発に反対している人びとを招き、日本各地でゴルフ場開発による環境破壊の現場を訪れ、ゴルフ場に反対している地域の人びとと交流をもった。

「日本でゴルフ場建設に反対して、建設をストップさせても、そのゴルフ場が他のアジアの国ぐにに輸出されたのでは、それは民衆の勝利とは言えないだろう」というタイの人の言葉が、以来日本でゴルフ場に反対している人びとの共通の認識となり、「ゴルフ場に反対するグローバル・

ネットワーク」が結成された。

とりわけ中・高生に伝えたい

強制連行の足跡を若者とたどる旅●村田　久

「若者とたどる旅」は今の公教育が触れない朝鮮半島の植民地支配と強制連行の歴史を若者たち、とりわけ中・高生へ伝えることを大きな目的にして、毎年八月に八泊九日のスタディツアー（韓国・九州）を行っており、今年で四回目を迎えることになります。

毎回六〇人以上が参加しており、その中で中・高生の参加は二〇人くらいです。参加者は千葉・東京・福井・山陰と多岐にわたっています。第一回以来、サハリンに強制連行され置き去りにされたままになっている朝鮮人の一時帰郷・永住帰国運動に取り組んでいる「中蘇離散家族会」と交流を深めています。

アジア・女・北九州に関することなら何でも

アジア・女・北九州●村田和子

八九年「PP21北九州・下関実行委員会」の企画第一弾として企画された「松井やより講演会」を準備した女性たちによって八九年秋に作られました。

「アジア」「女」「北九州」に関係するものなら何でもやるというもので、これまでセクシュアルハラスメント裁判の支援や「アリランの唄」上映などの活動をしてきました。マレーシア・ブ

南からの調査団●東京都千代田区神田神保町1-30 正光ビル402
アジア太平洋資料センター（PARC）
☎03(3291)5901
強制連行の足跡を若者とたどる旅●福岡県北九州市西神原町4122
アジア・女・北九州●福岡県遠賀郡水巻町頃末31-9 村田和子方

キメラ村ネットワーク誕生の原動力にもなっています。九一年三月には朝鮮人元従軍慰安婦の方を招いての証言集会をおこない、活動の幅を広げています。

会員制をとっていないかなりいい加減なグループですが、活動の積み重ねの中でこれまでのルーズ（？）な運営方法についての反省の声も出ています。

浪費はもはや許されない

日本消費者連盟●水原博子

「21世紀において、アジア太平洋地域が一層激しい競争や拡張、発展の焦点になり、その先頭に立つのが日本であり、またこの地域を基盤とする巨大な日本の金融・工業〝帝国〟がそれを支配することは疑いない」と一九八九年、「アジア太平洋消費者会議」に参加したこの地域の消費者代表たちは、会議最終の大宮宣言の中で危惧しました。多国籍企業が、進出先政府との癒着や、環境破壊、資源収奪、さらに固有の生活文化を破壊し、人びとの生存をも脅かしていることは、アジア太平洋地域の民衆から鋭く指摘され続けています。多国籍企業の母国で、〝豊か〟に過剰浪費の生活を続けることはもはや許されないことを、国内の運動で訴え、海外の消費者運動団体と連携を強めています。

日常レベルでODA問題を考える

ODA調査研究会●神田浩史

ODA調査研究会は一九八八年にPP21の調査研究活動の一つとして始まりました。当初はフィリピン、タイ、インドネシアで、現在はその三国に太平洋の国々を加えて四年にわたって活動を継続しています。

日本のODAが受取側の人びとにどのような影響を与えているのかを、受取側の人びとと共同で調査研究することを原則にしており、その成果は八九年の『無責任援助大国ニッポン』（JICC出版）、九二年の『検証・ニッポンのODA』という二冊の本にまとめられています。

日本のODAを監視し、その改革に向けて提言するのも大きな目的ですが、それ以上に、日常レベルでどのようにすればODAをなくすことができるかについても議論し、実践しようとしています。

こんなもんじゃない、べつの世界を目指す

オルタ研究会●大野和興

「オルタ研究会」は開かれた研究会として、論議を巻き起こす呼び水となる問題提起を行い、さまざまの対話をつくりだしながら、この日本を私たち自身はどうするのか、世界の人びととの間にどのような関係性をつくらなければならないのか、といったことを、一定の体系性を備えた具体的なプログラムとしてつくりあげようというねらいを掲げております。「オルタ」とは「こんなもんじゃない、べつの」（オルタナティブ）とでもいう意味です。

当面、①先住民、女、農民といった視点からいまの世界（工業・過剰消費・北・男社会・都市・交換のあり方等）をつくりかえる、②会社主義日本を徹底的に分析し、そうでない日本を考

日本消費者連盟●東京都目黒区中目黒3-13-29
☎03(3711)7766
ODA調査研究会●東京都新宿区左門町10 幸和荘2A
☎03(5269)0943
オルタ研究会●東京都文京区本郷1-13-2 PARC自由学校気付
☎03(3816)0161

える、③水俣宣言が提起した「越境する民主主義」の具体化――といった視点から課題に接近していきます。

アイヌ民族に学びつつ自らを育てたい

アイヌ民族と共に生きるシサムの会●木戸　宏

シサム（アイヌ語で隣人＝和人）の会は、九〇年十一月に福岡で行われた北海道ウタリ協会主催の〝「アイヌ新法」を考える集い〟の参加者有志によって発足しました。

月刊「シサム通信」の発行を中心に、北と南の交流をすすめる中で、新しいアイヌとシサムの関係を創り出したいと考えています。『近代』が問われ、地球人としての存在が問われる今、私たちはこのことにこだわります。

この六月「萱野茂さんを国会へ！全国遊説」を、東京から沖縄まで全国の仲間が協力して一四カ所で開催しました。この運動も点から線へ、そして面へと急速な展開を始めつつあり、時代の潮流を実感させられます。

育つということをアイヌ語でヤイレス（自らを育てる）といいます。私たちもアイヌ民族に学びつつ全国「シサムネットワーク」に自らを育てていきたいと思います。

ブキメラ村住民との交流・連帯活動をめざす

ブキメラ村ネットワーク●村田和子

三菱化成の実質的な子会社ARE社（マレーシアでの合弁会社）が放射性廃棄物を野ざらし投棄して隣接するブキメラ村の環境を汚染し健康被害を与えたことで、現地では操業差し止め裁判が行われています。

九一年春、三菱化成の現役社員（女性）の発案に「PP21プロセス」が全面的に協力して、ブキメラ住民を招いての「三菱化成の公害輸出を問う」マレーシアキャンペーンが実現しました。

「ブキメラ村ネットワーク」は三菱化成の公害輸出責任を憤り、ブキメラ村住民との交流・連帯活動をめざす人びとのゆるやかなネットワークです。

アイヌ民族と共に生きるシサムの会●福岡県遠賀郡水巻町二421-4
☎093(201)3238
ブキメラ村ネットワーク●福岡県遠賀郡水巻町頃末31-9 村田和子方

世界の反響、人びとの声

武藤一羊（アジア太平洋資料センター共同代表）

PP21は、水俣で合意されたように、一度かぎりの行事ではなく、「ピープル」の「プロセス」、世界的に国境その他の障壁を越えてわれわれが「世界の民衆となってゆく」プロセスとなった。

「ピープルズ・プラン21世紀」は、一九八八年に提唱された時点から大きい国際的反響を呼びました。八九年に日本を縦断して行われた国際民衆行事は日本の実行委員会がホストとなりましたが、共催団体としてそれを支えたのはアジア・太平洋で民衆の立場に立って活動する一四の国際団体でした。そのなかにはアジアの草の根民衆組織やNGOの連合体であるACFOD、国際消費者団体機構（IOCU）のアジア・太平洋組織、アジアキリスト教協議会に属するプロテスタント教会のいくつかのプログラム、アジア学生連盟（ASA）、カトリック学生運動（IMCS）などの学生組織、先住民の運動を一つの柱とする反核独立太平洋運動、カトリック青年労働者の組織であるYCW、人権問題で活躍する諸民族の発展のためのセンター（ACPP）、アジアのオルタナティブを探求する研究者の団体であるARENA、などがあります。いずれも草の根の活動と連動している運動です。

●PP21プロセスをともにする国際団体

ACFOD（発展のためのアジア文化フォーラム）
アジア14か国の民衆の立場に立つ草の根のNGOの連合体。本拠地・バンコック。

ARENA（新しいオールタナティブのためのアジア地域交流会議）
民衆のための発展、社会変革へ向けたオールタナティブを提言。事務局は香港。

IOCU Asia Pacific（国際消費者団体機構アジア太平洋事務局）
IOCUには五八か国一六八団体、アジア太平洋事務局（マレーシアのペナン）には一三か国五一団体が加盟する。

CCA-URM（アジアキリスト教協議会都市農村宣教委員会）
CCAはアジア一六か国一一〇のプロテスタント教会とキリスト教団体の協議体。URMの事務局は現在大阪にある。

CAW（アジア女性労働者委員会）
プロテスタント、カソリックの両教会にまたがるネットワークで、南アジア、東南アジア、東アジアの三地域をカバーする。事務局は香港。

実はこうしたアジア太平洋で活動する国際団体が協力して一つのプログラムを推進するのはこれが初めてでした。「民衆の力で二十一世紀をどのような世界にするのかを構想しよう」というPP21の呼びかけは、「タイムリー」、「野心的」という声で迎えられました。もっともその段階では、「野心的」とは、はたしてできるのかな、といういささかの危虞の念をもあらわしていたようですが。

◉海外の仲間に衝撃をもたらす

しかしいざ行事が始まって見ると、この危虞は吹き飛びました。北海道の先住民会議から水俣、福岡にいたる一九の国際会議の熱気は、海外からの三〇〇人を超す仲間たちをゆすぶり、融合させたと言えると思います。（もちろん受け入れ側の不手際や混乱への不満や抗議もどっさりあったのですが）。なにより、地域から世界までを階層を異にする運動が一緒に論じてしまうというスタイルが新しい試みと受け止められたようです。ジュネーブの世界教会会議（WCC）から参加したイズリエル・バティスタさんは、水俣会議の直後に報告書を書き、「PP21は、地域から出発して、アジア全体、そして世界的でさえある見通しをつくりあげようとする努力」であった、として「おそらくこれはわれわれの国際的アプローチの新しいスタイル、いやオルタナティブな方法論を示す」ものと評価しました。「日本の温泉で一緒にザコネして、一緒に歌い、会議の議題ではなく、民衆の計画を議論し、地元のグループがプログラムの枠組みを決める、参加者が「新しい議論の焦点」であることを発見する、などということは、われわれのい

つもの会議のスタイルにはまったくないものだった」とバティスタさんは言いました。地域や現場の運動のさなかで、それぞれの自立した主体によってになわれた国際的プログラムというPP21の独特のスタイルは、たしかに多くの海外の仲間に衝撃をもたらしたようです。インドのハーシュ・セッティさん（ARENA代表）は帰国後、とくに水俣と農民のプログラムにふれた長い報告のなかでバティスタさんと同じ指摘をしています。

◉一人歩きをはじめた水俣宣言とPP21

PP21から世界に向けて発せられた「水俣宣言―希望の連合」は予想されなかったような大きい反響を呼びました。ラテンアメリカでの反響は、参加したニカラグアのサビエル・ゴロスチアーガさんの活躍もあって、特に大きいものでした。宣言はただちにスペイン語に翻訳され、中南米のネットワーク社会問題研究ネットワーク（CRIES）をつうじて普及され、PP21は運動のなかに急速に浸透しました（ゴロスチアーガさんの提唱で九〇年八月には東京で日本中米会議が開かれましたが、今年八月の第二回会議は「PP21中米日本会議」とうたわれています）。そこからメキシコに本部を置く草の根イニシアチブの国際グループ（IGGRI）のような世界的NGOネットワークがPP21への参加をきめるといった広がりが生まれました。水俣宣言のメッセージはひとり歩きして、さまざまな世界の民衆運動のネットワークを結び付ける役割をはたしています。GATTウルグアイ・ラウンドに対抗するためにハンブルグに集まったヨーロッパのNGOは、水俣宣言に注目し、九二年初め、PP21との合同会議を提唱し、タイのチェンマイで討論会が、開かれました。また六月にはフランスのストラスブールでヨーロッパ統合にたいして民衆の立場を明確にしようとヨーロッパNGOの大結集（カイロス92）が開かれますが、これにもタイPP21組織委員会が特別に招待されています。水俣宣言とPP21はいわば一人歩きして、志を共有するさまざまな世界の民衆ネットワークを大きく結び付ける役割を果たしていると言うことができます。

CCA-Youth（アジアキリスト教協議会青年部）
CCAの青年組織でマニラに事務局。

NFIP（非核独立太平洋運動）
アジア・太平洋で非核独立をめざす運動体のネットワーク。事務局は太平洋問題資料センター（PCRC）。

IMCS（国際カトリック学生運動）
カトリックの国際的学生組織で、アジア地域の事務局は香港にある。

YCW-Asia（カトリック青年労働者連盟）
カトリックの青年労働者による活動家養成のための国際的組織。本部はブリュッセル、YCW―Asia事務局は香港。

ASA（アジア学生連合）
アジア各国の全国的学生組織が加盟する国際学生団体。事務局は香港。

INODEP-Asia（人民の発展のための全キリスト教統一研究所）
パウロ・フレイレの教育理論に基づく教育運動団体。本部はパリ、アジア事務局はインド。

AMRC（アジア・モニター資料センター）
多国籍企業がアジアの民衆にどのような影響を及ぼしているかの調査、出版を主活動とする。事務局は香港。

ACPP（民衆の発展のためのアジアセンター）
社会正義をめざす研究調査、セミナー、ビデオやスライドの制作、資料・情報の提供などを行う。事務局は香港。

IFDP（食料・開発問題政策研究所）
サンフランシスコにある。出版物『フード・ファースト』は高く評価されている。

◉タイPP21は希望に満ちた第二歩

もちろんPP21共催者の諸団体は、宣言を報告とともに機関誌で知らせました。なにより参加者が数多くのレポートを、運動の機関誌や一般雑誌に書きました。国際インディアン条約評議会を代表するカナダ先住民のエド・バーンスティックをインタビューしたインディアンの新聞は、「希望のビジョンがインディアンを励ます」と世界先住民会議を報じ、そのなかで、水俣宣言の「越境する民衆の政治的権利」を引用しているのが印象的です。

こうしてPP21は、水俣で合意されたように、一度かぎりの行事ではなく、「ピープル」の「プロセス」、世界的に国境その他の障壁を越えてわれわれが「世界の民衆となってゆく」プロセスとなりました。第二回PP21のプログラムが、タイの運動の連合によって行われようとしていることは、そのことを立証しています。タイの人々の民主主義への熱い思いと勇敢な闘いに支えられて、タイPP21が、このプロセスにおける大きい、希望に満ちた第二歩となることは疑いありません。

92年タイへ

一九九二年十一月二十日から十二月十日まで、タイでピープルズ・プラン21世紀（PP21）の集まりが開かれる。

「地域、全国、国際レベルでの参加民主主義を、
民衆の姿を目に見えるように
民衆にもっと力を」

これがその民衆の集いのテーマである。

一九八九年八月、水俣に集まった三〇〇人のアジア太平洋各地の人びとと日本の諸運動にかかわる代表たちが水俣宣言を採択し、三年後の一九九二年にタイで再会を約束したときから、このPPプロセスの第二ラウンドは始まった。

一九九一年タイで軍部のクーデター。農村で、スラムで、民衆の自立のための活動を積み重ねてきたNGOや民衆の諸組織は民主化を求める活動を開始した。同年十月にはタイで世銀・IMFの総会が開かれた。これに際して軍事政権は国際的な認知を得て、海外からの援助、投資を導入するため、バンコック市内を全面的に交通制限し、会社も学校も休みにするなど、全力をあげてこの世銀・IMFの総会を成功させようとした。他方、農民、NGOの側は、この機会をとらえて「声なき民の声」を世界に聞かせるべく、全国から農民たちがバンコックに集まり、学生たちとともに連日デモをした。

そして一九九二年。強引に首相の座に居直ろうとしたスチンダに対して民衆は粘り強い闘いを開始した。五月十七～十八日の流血の事態を乗り越えて、「地域、全国のレベルで参加民主主義」を求める闘いは今も続いている。この闘いの過程で、タイの民衆の姿は全世界にはっきりと見えるものとなってきた。

九二年、タイPP21では、十一月二十日からアジア太平洋の各地から集まった人びとがタイの民衆運動とその志を分かちあい、経験を交流し、未来を語り合う。そして十二月十日にはタイの

1992年タイPP21 スケジュール

11月20日～12月4日
階層別ワークショップ
- 農民（東北部で）
- 少数民族／先住民（北部で）
- 労働者
- 女性
- スラム住民
- 青年／学生
- 漁民

テーマ別ワークショップ
- 持続可能な発展
- ツーリズム
- 宗教／文化
- 平和／人権など

〈以上のワークショップが上記日程の範囲内で1週間あるいは4～5日間、タイのNGOと国際諸団体の協力で行なわれる〉

12月6日～10日
まとめのためのメイン・フォーラム（バンコックのスコータイ大学で）
- **6日**　総会。文化パフォーマンスによる開会と各ワークショップの内容の共有
- **7日**　総会。午後から階層横断的分科会
- **8日**　階層横断的分科会
- **9日**　参加者のイニシアチブによるフリーフォーラム
- **10日**　まとめの総会　文書採択

12月10日夕方から
憲法六十周年記念・世界人権デーの集会に合流

（92年6月現在）

憲法記念日、そして世界人権デーをみんなで祝う盛大なお祭りをともにする。

今、民主化運動の真っ只中にあるタイのNGO—CORDの代表であり、タイPP21の代表でもあるバントン・オンダムさんは一九九二年四月に福岡に見えたとき次のように語った。

国際的ネットワークづくりを通じて、一世紀にわたって闘い続けることができるような機構・組織をつくっていきたい

バントン・オンダム（タイPP21組織委員会代表）

過去十年間、タイでは、多数の人々ではなく少数の人々に利益がいくということがありました。社会がどういう方向に進むかについて、二つのセクターがあります。一つは財界と政府です。そしてもう一方のセクターが民衆です。ですから世界とそれぞれの国の、権力構造というのを考えなければいけない。そして経済界と政府とが政策の過程を独占するならば、民衆の苦しみが続くということを意味します。

一九八九年、PP21に参加するために日本にやって来ました。その時、農民の会合に参加しました。私たちは農民の分科会、農民との交流の中で、農業政策が政府と経済界で行なわれるならば、農民に苦しみがもたらされるのだということを結論として明らかにしたのです。

政府と商人、企業が、農民よりよく知っているといって近代的な技術を持ち込んでくる。そして実際には、近代的な農業技術というのが、農民と環境、エコロジーに大きな打撃を与えたのです。ですからタイでも、そして他の多くの国でも、こうした近代農業はよくないということ、もっとそれ以前の段階に戻ろうという動きが出てきています。タイでは農民たちが実際に、もうこうした政府や経済界がやろうとしている農業に従うのはやめて、自分たちの祖先の知恵に従おうといい始め、そのような農業の実践を始めたら、食べる物も十分得られ、よい結果が見られるようになりました。そして、これからはその、オルタナティブな農業実践をやっていこうということになったのです。これが、私たちの、オルタナティブな社会が必要だというPP21の意味を明らかにする実践なのです。

◉地域・全国そして新たに国際的実践をめざす

私の考えでは、オルタナティブな社会というのは、既存の社会構造を転換するということなのです。農民だけでなく、女性も子供も青年も先住民も、すべてのセクターがそれぞれの方法で、オルタナティブなやり方というのを見つけていかなければならないと思います。そのことを通して、私たちがオルタナティブな社会と呼ぶものに寄与することになるのです。

私たちがピープルズプラン21というときに、いわゆる地域計画のような、静止したものをイメージしてはならないと思うのです。むしろ、そういう静止した計画ではなくプロセスがあって、様々なセクターの人がやってきてともに参加して、新しい社会の方向性をつくり上げていくということなんです。

そしてそのプロセスは、それぞれの地域で、全国で、そして国際的なレベルで行なわれなければなりません。ここ四～五年間に、タイでは各地域、そして全国というレベルでそういった実践をやってきました。けれども国際というレベルが欠けていたのです。

八九年に私が日本にやって来たとき、この国際というレベルが日本で行なわれているということを発見したのです。ですから皆さんは、地域と全国と国際というレベルを持っているのです。私たちタイの民衆は、日本でのこの経験を生かすことができるのではないか、つまり、今までや

ってきた地域と全国というレベルに加えて、新たに国際というレベルを付け加えることができるのではないかと考えたのです。

◉国際的レベルでのネットワークを

PPの経験を通して、私たちの経験を世界に伝えたいと思います。つまり人びとの声をどうやって届けるようにするか、ということだと思います。それで水俣宣言を提示したのです。それは十分ではなくて、まだ始まったばかりです。声を届かせただけで、まだ何も実現されてはいません。

声を聞かせるだけでなくて、民衆の組織として目に見えるようなものにする、ということが第二の段階です。

私たちはタイで、たとえば農民を組織して、単に農民の声を聞かせるだけではなくて、農民自身が何事かを成すようにしたいのです。今、農民たちはタイで非常に激しく闘っています。農民たちはもはや権力を信用していません。この闘いの中で、農民たちは多くの国際連帯を必要としています。今も農民たちは、互いに助け合って闘うつながりを持っています。

けれども、農民だけではなくて、先住民とか女性とか青年とか、そして労働者の間でも、もっとネットワークをつくっていく必要があります。ですからこのタイのPP21においては、いろんなセクターのネットワークを、国際的なレベルでも組織していきたいと思っているのです。そのメカニズムをつくり上げ、それを通して一世紀にわたって闘い続ける機構、組織をつくっていきたい。

これがPP21の目的とプロセスです。

●92年タイへ

民衆の自己決定権を

―地域、全国、国際のレベルで―

'92タイPP21組織委員会

背景と根拠

タイのNGOと民衆運動の広範な連合は、アジア太平洋地域さらに他の諸大陸の国際諸組織と共同して一九九二年十一月に、ピープルズ・プラン21世紀（PP21）という名称のユニークな民衆プログラムを開催する。これは、来るべき世紀に地球のあり方を決定する主要な、独立した主体（アクター）としての民衆が力をもつことをめざすものである。ピープルズ・プラン21世紀は異なる国々、異なる大陸の民衆が、実り多い相互作用を通じて、開発の名のもとに世界の民衆の多数と環境とに破壊的な影響をもたらす諸制度や諸機関に打ち勝ち、オールタナティブな世界を実現することのできる「希望の連合」へと自らを鍛えあげていく長期にわたるプロセスである。タイでのPP21のプログラムはPPプロセスのなかでの二度目の行事である。PP21は日本の広範な民衆運動とNGOによって一九八九年に日本で開始された。

PP21は、開催国の民衆運動とコミュニティーに根ざした国際行事だという点でユニークである。一九八九年の日本と同じように一九九二年のタイは単なる場所なのではなく、一連の行事の焦点となる。集い、フォーラム、文化イベント、エクスポージャ・プログラム、具体的な連携のための諸活動、その他想像力を働かせたさまざまな形態の民衆交流にタイの草の根の民衆が自らの問題を話すために参加する。同時に地球全体のコンテキストのなかであらゆる問題をとりあげ、包括的な展望をも描きだす。このように、PP21は一国の現実と地球規模の現実との間の生きた対話を保障するものである。だから、この地域で活動する国際的諸組織やネットワークと他の諸大陸の国際的諸組織やネットワークがともにタイの組織委員会

と一緒にPP21タイを組織することになっている。

グローバル・チャレンジ

PP21タイは全世界の決定的な転換期に開かれる。全世界は第二次大戦後の四五年間で一度もなかったような大きな変化を経験している—冷戦の終結、東ヨーロッパ諸国の体制の崩壊、他の社会主義諸国で現実に、あるいは潜在的に進行しつつある変化。こうした事態は、長い目で見れば、いかなる強制的手段をもってしても押さえこむことのできない民衆そのもののパワーがたかまりつつあることを示している。しかし急激な変化の結果、少なくとも今暫くの間は、世界のできごとがビッグ・パワー—ソ連を屈伏させた米国を初めとしたサミット大国の手に握られることになる。世界の権力中枢は、世界銀行、IMF、GATTなどの国際諸組織を含めて、この中枢から排除されている数十億の民衆を犠牲にし、世界の環境を脅かして「市場の力」という彼らの万能薬を全世界に押し広げようという野望を好き勝手に追求してよいと思っている。このプロセスの進行にともなって南北格差と多くの国々での貧富の差はますます広がり、環境は回復不能なまでに破壊されつつある。さらに湾岸戦争は、軍事的には米国によって、財政的には日本によって支えられたこの独占権力が「新世界秩序」という名前で、北のビッグ・パワーによって支配される秩序の合法性を確立しはじめるという不気味な状況を生み出した。

一九九二年のPP21タイはこのような状況のなかで開かれる。世界の民衆、とくに第三世界の民衆を再び尊厳をもった主権者(sovereign entity)として目に見えるようにし、その声を世界の他の人びとに聞こえるようにすることで、自らこの「新世界秩序」の管理者と名乗りをあげたものたちによる世界政治の独占をうち破るために開かれる。

今はまた、近代の発展（開発）の全歴史過程を見直し、数々の努力をひとつにあわせて、新しい、民衆に顔を向けた、環境に調和する発展（開発）モデルを生みだすよい時期、よいチャンスでもある。私たちは一九八九年、水俣でその努力を始めた。水俣で、日本におけるPP21の成果が総合され、今、私たちは未来のビジョンを具体化するために次の一歩を進める。一九九二年は、クリストファー・コロンブスによる「アメリカ発見」の五〇〇周年に当たっているので近代史の見直しという作業にふさわしい時である。このコロンブスによる「アメリカ発見」は近代の破壊的な開発を象徴しており、現在その破壊は飽和状態にまで達し、オールタナティブな未来のための民衆の努力と闘争を通じてひっくりかえされなければならないところにきている。

一九九二年のPP21はタイの現実とタイの民衆運動、そして他の国々、他の地域、他の大陸で行なわれた、同じような努力を基礎にしてこれを行なう。GNPの超成長、バンコックに乱立する摩天楼、東部臨海地帯の広大な工業地帯の創出をもってしてタイを声高に賛美する人びとがいる。このコーラスのなかで、タイ国民の本当の意味での多数である草の根の女、男、青年、農民、漁民、都市労働者たちの声はかき消されそうになる。PP21のプロセスのなかでは、この人びとが真実を語り、別の発展（開発）の道があるはずだし、可能なのだということを示し、それをはっきり言い表し、実現するために他の地からやってきた人びととともに力をあわせる。

間違いなくタイの現実に根ざしたもうひとつの発展のコースを追求するというタイの民衆の決意は「新世界秩序」の名のもとで別の声をだまらせ、別の道を妨げようという地球の現実のなかに位置付けられている。タイの民衆がその願いを達成するためにはあらゆるところですべての民衆がオールタナティブ、民衆の新しい世界秩序を主張し、真の草の根の、参加する民主主義を達成し、オールタナティブな民衆中心の人間的な発展（開発）を追求し、力強いピープルズ・パワーの主張を通じてこのすべてを達成することが必要である。

タイのPP21は、このように国際的な民衆の声とひとつになり、手を携えて、世界の民衆が象徴的な意味でも実態的な意味でも、世界の未来をつくる主体として自己主張できるようになることを強く目指している。あらゆるところの民衆が、自己決定権を—その決定がどこでなされるものであれ、コミュニティー・レベルのものであれ、国家のレベルのものであれ、国際的なものであれ—確立しようとする地球的な努力の一部である。このようなコミュニティー・レベルから、全国、地球のレベルに至るまでの越境する参加民主主義は、世界の権力中枢を世界の連合した民衆、「希望の連合」に置き換えることによって、排

除のシステムを打ち破るだろう。

PP21に向けた地域の共同の努力

PP21は一九八九年に初めて日本で開始されたそもそもの初めから、新しいタイプの、新しいスタイルの運動として受けとめられた。PP21は、個別の課題を基礎とした現実の批判にとどまらず、現実に立脚しながら、未来を志向するプロセスを目的とするものである。民衆は否定的なものを押しつけられることに抵抗して行動するだけでなく、自分たちのためにオールタナティブな未来を創造しなければならないし、それができるのである。

PP21はプランというよりはプロセスなのであり、継続されねばならないし、いよいよはずみをつけていかなければならない。アジア太平洋各国の民衆運動は、よりよい質の暮らしを目指す闘いにおいて、「コミュニケーションと友好と連帯のネットワークを編み上げ」続けなければならない。そして、民衆の闘いに関わっているすべてのグループは、NGOも、他の正義を目指す諸グループも、そのネットワークと連帯を打ち固め、底辺の民衆とともに「希望の連合」を形成するためにがんばっている。

PP21の共同よびかけ団体は、したがって、開始されたプロセスを追求するための地域的な集団の努力に責任をもってかかっている。主としてアジア太平洋地域の団体と国際団体からなる共同よびかけ団体は、次のPP21を一九九二年にタイで開催するという計画を強く支持している。

PP21の共同よびかけ団体／PPコレクティブとは、単にPP21に協賛するのではなく、PP21のプロセスを推進することに参加する各国の団体、アジア太平洋地域の団体、国際団体である。きわめて積極的な支援の役割を果たすために、共同よびかけ団体／コレクティブは、プログラムを実施する責任を共有する。なかでも、共同よびかけ団体／コレクティブの任務は以下の点である。

(1)PP21のプランニング、その重点や目標の設定を助ける。(2)PP21の概念をはっきり言いあらわし、発展させ、ひろめるのを助ける。(3)スタッフを提供するという形でPP21の実施を助けたり、それぞれの組織の力量の範囲内での助力を行なう。(4)PP21の包括的な総括に参加する。

このような任務を設定したのは、「希望の連合」を築き、強化するために地域の集団的な調整された努力をもっともよく結びあわせるためである。

タイの発展（開発）の重要性

アジアの歴史のなかで、タイは交差点の役割をしている。タイは一度も植民地化されたことがない。しかし、初めに植民地権力、そしてその後には侵略主義的な帝国主義軍隊が他のアジアの国々の民衆を支配し、従属させるためにタイをつかった。多くの植民地権力はタイの支配エリートと緊密な関係を維持しながら、他方で他のアジアの国々を植民地化したのだった。日本の帝国主義軍隊はビルマを侵略し、ビルマを従属させる過程でタイを侵略した。初めにフランスと、後に米国がインドシナの民衆を抑圧するためにタイを使った。そしてタイの軍部エリートはインドシナ民衆にふりかかった破壊と混乱に喜んで手を貸したのだった。この全歴史を通じて、帝国主義権力とタイ国内の支配エリートの陰謀のなかでタイの民衆は、将棋の駒として扱われている。タイの民衆自身の民主化の要求と願いはいつもふみにじられ、権威主義的な軍部中心の支配体制が民衆の生活を支配した。タイの民衆はおそらく、沈黙を強いられながら苦しんだ。しかし、決していつも黙っていたわけではなく、反対と闘いを幾度も重ね、多くの命を失い、長い悲劇的な歴史を経て、基本的な民主化と人権をかちとり続けてきた。

今日、タイの民衆は新しい種類の侵略を目撃し、経験しつつある。この侵略は急激な経済成長と近代化という装いを通じて進行しており、タイはNIC（新興工業国）のひとつとなるという名声をえようとしている。今再び、タイのエリート（今度もまた得をしようとしている連中）が、外国のパートナーと一緒になって「NIC圏」と言われることを誇りにし、喜んでいる。

一九九〇年、タイはアジアの新しい虎、一一パーセントという驚くべき経済成長率でこの地域のなかでもっとも急激な成長を遂げつつある国と賛美された。外国からの巨額の投資を奨励するために金融引き締め政策が緩和された。香港の政治経済情勢の不安定化にともなって、タイは他の国々と競うようにして首都を東南アジアの金融センターにしようとしている。急速な工業化を目指して、そのための準備として東

部および南部にインフラストラクチュア整備が計画され、急激に実行されている。

タイとタイの民衆はスーパー・パワーの地政学的ゲームのなかで将棋の駒のように扱われてきたうえに、今また日本のような新しい経済大国によってアジアの地政学の駒にされようとしている。しかしながら今度もまた、土地や川や海岸、水資源、文化、そして最終的には自分自身の破壊という形で夥しい犠牲を払わせられるのは民衆である。タイはまた、他の国々のための新しい経済モデルとしてもちあげられている。だが他方、他の国々の民衆にとってタイの民衆の経験から学ぶことも多くあるはずである。

タイの民衆は、より大きな民主的参加をもとめて奮闘しつづけただけでなく、すでに達成したものを守っていくためにも警戒心を高めていなければならなかった。そういう意味で民主主義の成果はいつでもひっくりかえされる可能性があり、この点でもアジアの他の民衆と共通するものがある。

タイが直面している諸問題と民衆運動

過去二―三年間に、多くのことが変化した。国際的なダイナミズムがこの国にも流れこんできた。タイはすでに「民族主義」的な性格をそなえているので、国際資本を通じた外国の搾取を防ぐことができる、それがタイ国内のダイナミズムであろうと考えられていた。しかしながら、国内資本が国際資本と結びついた時、事態は変化した。単に一般的な合弁事業ではなく、資本の国際化なのである。

農業と工業の発展のアンバランスによって二〇〇〇年までにはタイの農民の一五パーセントだけしか残っていないだろうと予想されている。

このような状況のなかで、民衆運動は全体状況の分析と理解に基づいて世の中の傾向に対して応えてきた。多様な形態の運動があらわれてきた。さまざまな課題についての既存の行動グループのなかには、新しい状況に対応するようにその役割を調整しなおすことによって必要な歩みをすすめることができたグループもある。さらに、農村の貧しい人びと、労働者などは、次のように自分たち自身の問題や関心に対して独自の動きと対応をしめした。

1、環境を含む土地問題に関する闘い。この種の運動はタイ北部と東北部にみられる。コミュニティー・フォレスト（共同体林）やアグロ・フォレスト（農業林）をつくろうというよびかけが具体的な努力として行なわれている。

2、漁民の運動。漁民の運動は生活と習慣が汚染によって脅かされている東部臨海地帯およびタイ南部と東部に主として形成されている。

3、ビジネス・センター（企業、多国籍企業）と競う民衆運動があらわれている。この運動は多国籍企業および土地からの追い立てに対して闘っている。「自然資源をめぐる戦争」ともよばれている。たとえば東北部では多国籍企業が製紙業の需要を充たすために木材伐採権を取得しようとしており、伐採権が認められた地域では農林業を基盤とするコミュニティー全体が立退かされている。

4、ダム・プロジェクトに反対する民衆運動と民衆の諸組織。たとえば南部のケーン・クルン、東北部のパク・ムル、南西部のナムチョン。

5、土地、水資源、水を塩化させてしまう塩採掘などのような環境と自然保護の諸問題をめぐる民衆の運動。

6、バンコックを初めとする各地でスラム地区の住民や都市貧民が行なっている民衆運動、これは住居の権利を求めて闘っている主要なグループをなしている。

7、労働運動（従来の労働組合の質を越える運動）。同じような種類の生産、集団、地域区分を基盤にした新しい形態の運動である。

8、アクション・リサーチや意識化研究などのアプローチで民衆運動を支援している知識人集団の活動。

9、草の根レベルの問題に関わり、闘いの最前線となっているという意味で長い歴史をもつ学生の運動。

以上の他に、中産階級のNGO運動があり、これは一九八〇年代（あるいはそれ以前）に形成された新しい形態の社会運動であって、他の諸階層や諸運動を支援するうえで重要な役割をはたしている。ここしばらくの期間、有効な運動のひとつとみなされている。

こうしてみると、それぞれの運動の活動は、その限界ゆえに、その目的や願いを実現できていないことは明らかである。単独では闘うことができないのだからすべての勢力をひとつに合わせることが必要である。重要なことは、民衆の諸運動をつよめるために、とりわけアジア、そして他の第三世界諸国との理解

と国際協力を発展させることである。

タイの運動は次のように分類することができる。

1、主要な政策決定についての批判

民主化は、学生、大学人、専門職業人、そして一般の人びとの課題であった。チャチャイ政権の時代に、大規模ダム建設、東部臨海工業地帯の建設、土地浸食や森林伐採、ゴルフ場や観光開発の拡張、塩採掘、結社や出版の自由の制限、人権侵害といったさまざまな問題に関して、これらのグループは声をひとつにして政府の政策やその決定プロセスを問題にした。

二月のクーデタの後、民衆は、その意見の表明に制限を加えられるようになった。少しずつではあるが断固として、民衆はいろいろな問題を取り上げはじめた。新憲法制定への参加の拡大、国営企業における労働組合の禁止問題、民主的な選挙によって選ばれた政府の復活、NGOや農民グループ、大学関係者もアグリビジネスの独占の政策、スラム住民の立退きなどの問題について声をあげはじめた。運動の連合は分権化と都市と農村の貧民優先政策を主張した。

2、オールタナティブの実践、政策、主張

タイのNGOは大規模ダムのマイナスの影響に反対する人びとの意見を有効に動員することができた。その結果、いくつかのプロジェクトが中止されたり、その実施の速度が緩和されたりした。

第二にコミュニティー・フォレストという考え方が定着し、広まりつつある。

オールタナティブな総合的農業の実践と実験が広範にすすめられている。コミュニティーに基盤をおいた協同組合、きこりのグループ、クレジット・ユニオンが発展しつつある。

3、コミュニティーに力をつける

教育やトレーニング、文化の再生、法律相談サービス、経済プロジェクトなどを通じてNGOは農村共同体、都市スラム、女性、先住民が理解や組織化の基礎、リーダーシップ、能力を強化するのを助けてきた。

4、ネットワーキングと連帯

フォーラムや交流を通じて、タイNGOは、ネットワークをつよめ、異なる諸グループの間に連帯を築く

役割を果たした。しかし、あらゆる問題の根っこにある原因はタイのなかだけにあるわけではないので、国と国、大陸と大陸一真に地球規模の連合が緊急に必要とされている。そこでタイNGOは、相互に豊かになり、将来の活動を一層効果的にするためにPP21のプロセスを迎え、それに参加することをぜひ望んでいる。

一九九二年タイPP21

PP21タイは、世界の民衆が再び見えなくさせられ、その闘いが「地域紛争」という疑わしいカテゴリーに押しこめられようとしている歴史的な特殊な状況のなかで開かれようとしている。GNPの超成長、バンコックに雨後のたけのこのようにできた高層ビル、東部臨海地帯に建設された工業地帯などをもってタイを賛美する声は世界中にこだまする合唱となって、草の根の女性、男性、青年、農民、漁民、都市労働者たちの声を圧倒し、かき消さんばかりになっている。このような状況はタイばかりではない。

一九九二年にタイで開かれるPP21は、世界の民衆、とりわけ第三世界の民衆を、尊厳をもった主権者として目に見える存在とし、その声を世界の他の地域に届かせるために開かれる。近代の発展（開発）の全歴史を見なおすべき時であり、よい機会である。PP21はタイの現実とタイの民衆運動、ならびに他の国々、他の地域、他の大陸での同じような努力を基にしてその作業を行なう。

今年いくつかのPP21の準備会議が開かれる。タイでもアジアの他の国々でも全国規模で民衆運動とその戦略と成果をもっと学ぶためにフォーラムや会合や交流が行なわれるだろう。地域というレベルでは、開発のオールタナティブに関する会合がPP21コレクティブによって召集される予定である。これらの会合のすべてが一九九二年の十一月の一連の行事のなかに集積される。

1、コミュニティーと一緒に生活し、コミュニティーから学ぶ

PP21の参加者はコミュニティーを訪ね、家族やグループや運動と交流することを通じてタイの現実を経験する機会をもつことができる。参加者はその状況や闘いやビジョンをわかちあう。このプロセスは相互理解、友好、連帯の形成につながるだろう。共通の問題、共通の関心、相違点と多様性がはっきりして

くるだろう。それは後に個別の会合で行なわれることになる討論を刺激するだろう。

コミュニティーの訪問は受け入れコミュニティーとの相談のうえで参加者の関心に応じて組織される。

2、階層別ワークショップ…農民、漁民、労働者などのワークショップにおいて、アジア全体の状況との対比のなかでそれぞれの階層の優先課題や戦略が検討される。このことによって草の根の状況と地球の抑圧構造との間のつながりを認識する助けとなる。

3、課題別ワークショップ…これは階層横断的な討論とネットワーキング、連携の形成を促すものである。二種類のワークショップが考えられる。ひとつは、ツーリズムや出稼ぎ労働者といった地域レベルでの問題を検討する。もうひとつは平和、人権、環境、女性などに関する一連のワークショップで複数の階層にまたがる闘いや連動をとりあげる。これらのワークショップでは、階層別ワークショップのなかでてきた認識を生かして、複数の階層の諸問題を具体化し、採択する行動戦略に現実性と緊急性を与えるだろう。

4、総合フォーラム…ワークショップでてきた諸問題を総合して、宣言と行動計画にねりあげる。新しい民衆の世界秩序の出現に向かい、草の根、全国、国際というあらゆるレベルでの参加民主主義を推進し、持続する人間的な発展のための発展（開発）オールタナティブを具体化し、「希望の連合」を現実にものにするためのつながりや行動を強化する。水俣でのPP21と同様、進行中のPPプロセスを推し進めるものとして民衆の行動計画を、つくりあげる。

このプログラムの最後の一週間、PP21タイのすべての参加者はひとつの大きな敷地のなかで暮らし、そこにはタイの出版物や諸作品が展示され、文化行事がなされ、ワークショップ、コンサルテーション、非公式の会合、そして最後に総合フォーラムが行なわれる。参加者はこの行事をおおいに創造的でダイナミックなものとしていくであろうことを確信する。ともに集う地球コミュニティーの力を象徴し、共同のビジョンを実現しようとする民衆の決意にみちた声をひとつにするものとして。

（井上礼子訳、『世界から』41号より）

●92年タイへ

タイへ そして未来へ向けて

神田浩史（'92PP21実行委員会事務局長）

一九九二年・ピープルズ・プラン21世紀・タイ国際民衆行事へ向けての日本での取り組みは、九一年十二月の安曇野シンポジウムから始まりました。「暮らし／地域／社会をつくる」と題したこのシンポジウムでは、八九年以来の再会を懐かしみ、また、新しい仲間の参加を歓びながら、九二年タイに向けて日本の民衆のオルタナティブ実現の重要性が、そしてそれに向けての様々な困難が議論されました。

続いて九二年四月には、八九年にはアジアンフェスティバルで大きく盛り上がった福岡で'92PP21実行委員会が結成されました。タイから招いたゲストにタイでの準備状況を確認しながら、タイ国際民衆行事に向けての日本での準備と日本からの参加の仕方などが議論されました。その議論をうけて、五月には東京でコーディネーターズ会議が開かれ、(1)水俣宣言をより具体化するためにオルタ研究会を組織する、(2)'89行動計画を検証する、(3)PP21メディアとしてパンフレット「PP21」の作成、季刊「オルタ」発刊、月刊「じゃなかしゃば」の継続、(4)財政、組織などが決められました。

いよいよ六月には季刊「オルタ」が発刊されます。発刊にあわせて六月二十七日に'92ＰＰ21／『オルタ』創刊記念シンポジウム「多民族社会を生きる」が東京で開かれます。ブラジルのアマゾンの先住民、日本のアイヌ民族からの特別報告をうけて、在日朝鮮人、沖縄からの参加者と〈多民族がいきいきと共存できる世界〉の構想が可能かどうか議論していきます。

同時に六月二十八日には第二回'92ＰＰ21実行委員会が開かれます。四月の福岡での実行委員会結成から、より広く'92タイ国際民衆行事をつくっていくための実行委員を募り、タイに向けて日本からどのようなオルタナティブを提示できるのかを議論していきます。実行委員は一口一万円を納入していただき、このうちの半分は日本での運営費用、半分はタイのＰＰ21実行委員会費用とします。実行委員には毎月ＰＰ21のニュースレター「じゃなかしゃば」を送り、また今後のさまざまな討論、活動への参加をよびかけていきます。

九月五日、六日には、山形県置賜で置賜百姓交流会を中心にタイ農民を交えて、農民、農民の側からのオルタナティブについての提示をうけての議論がもたれます。また、九月七日から二十日までタイの劇団ＭＡＹＡが日本各地を公演し、'92タイ国際民衆行事をアピールします。

十一月二十日から始まる'92タイ国際民衆行事を直前にして、十月三十一日、十一月一日には東京三多摩（予定）で、タイＰＰ21に日本から提案するオルタナティブを練り上げます。'92タイ国際民衆行事の参加者は人数が限られるので、九三年一月には報告集会を開き、今後のＰＰ21プロセスをどう進めるかを議論し、'92ＰＰ21実行委員会の活動に区切りをつける予定です。

「民衆がつくる」社会、「いまのようでない」世界を構想しようとするＰＰ21は九二年で終わるわけではありません。一つの節目として、また飛躍への一段階として、'92タイＰＰ21が開かれます。この'92タイＰＰ21に向けて、アジア太平洋の人々から「経済大国」「北の収奪国」日本に

生きる私たちに常に突きつけられる「日本をどうするのか」という問いかけに対して、どのように答えていくのか。アジア太平洋の人々とともに生きる日本の民衆の世界を構想し実現するために、ぜひ'92ＰＰ21実行委員会にご参加ください。また'92タイＰＰ21に向けての数々の討論、活動にぜひご参加ください。そして一九九二年を一つのステップとして私たち自身の未来を構想していきましょう。

ＰＰ21出版物リスト

（お問合せはＰＰ21実行委員会へ）

ピープルズ・プラン21世紀　希望の連合へ1989報告集　１０００円　ＰＰ21実行委員会

オールタナティブ討論資料集(1)(2)　各１０００円　ＰＰ21実行委員会

歴史を担って未来へ向かう　世界先住民族会議全記録　１５００円　ＰＰ21・北海道

世界先住民族会議（英語版）（日本語版）　ＰＰ21・北海道

出会いと解放のアクション・リサーチ報告集　ＰＰ21・北海道

農業・農民国際交流'89　農業・農民交流東京事務局

食糧自立を考える盛岡国際集会　農業・農民交流東京事務局

新聞報道に見る　ピープルズ・プラン21世紀　ＰＰ21実行委員会

打ち上げ花火'89　アジア学生交流会報告文集　打ち上げ花火'89実行委員会

ルック・アジア・ウィークエンド　ＰＰ21実行委員会

アジア女性フォーラム　ＰＰ21働く権利と女性労働運動分科会報告　４００円

ピープルズ・プラン21世紀神奈川国際シンポジーム・ともに生きる！アジアの人びとと―いまＯＤＡは　草の根援助運動連営委員会

ＡＷＳＬ（アジア労働者連帯会議）についての資料集　３００円　ＡＰＷＳＬ日本委員会

同　資料集2―アジアの労働運動と課題　８００円　ＡＰＷＳＬ日本委員会

'89ＡＷＳＬ日本総会報告集　１０００円　ＡＰＷＳＬ日本委員会

アジア太平洋消費者会議報告集　500円　日本消費者連盟
PP21アジア・太平洋・琉球弧住民交流集会抄録　トマホーク阻止京都連絡会
アジアンフェスティバル報告集　アジアンフェスティバル実行委員会

百姓は越境する　山形・置賜百姓交流会＋大野和興共編　2060円　社会評論社
人びとは国境を越えて未来を創る―ODA・アジア太平洋と日本　武者小路公秀監修／北沢洋子編　2060円　第三書館

●関連文献

英文季刊誌「AMPO」（VOL20-1&2／VOL20-4&VOL21-1／VOL21-2&3）　1000円　アジア太平洋資料センター
季刊「世界から」（33号・34号・36号）　880円　アジア太平洋資料センター
無責任援助大国日本　390円　JICC出版
検証・ニッポンのODA　村井吉敬編著　1700円　学陽書房

●定期刊行物など

ODA調査情報　ODA調査研究会　☎03（5269）0943
リンクス　APWSL日本委員会　☎03（3433）0375
シサム通信　アイヌ民族と共に生きるシサムの会　☎093（201）3238
消費者リポート　日本消費者連盟　☎03（3711）7766
ブキメラ村から　ブキメラ村ネットワーク　☎093（202）5683
ぴいぷる People to People Aid　草の根援助運動運営委員会　☎045（825）8557
強制連行の足跡を若者とたどる旅　☎093（202）5683
じゃなかしゃば―PP21実行委員会ニュース　☎03（3816）0161
オルタ　アジア太平洋資料センター　☎03（3291）5901